

慶安五年刊『訳和和歌集』翻刻と解題 附校異 (三)

内野, 優子
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/8977>

出版情報：文献探究. 41, pp. 74–96, 2003-03-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

慶安五年刊『訳和和歌集』翻刻と解題

附校異（三）

内野優子

一 『訳和集』に見える性空上人歌

『拾遺集』卷第二十 哀傷（一三四二番）注1

性空上人のもとに、よみてつかはしける 雅致女式部

暗きより暗き道にぞ入りぬべき遙に照せ山のはの月

と詠みてやりたりければ、返しをばせで、袈裟をなむ遣はしける。さて、それを着てこそ失せはべりにけれ。そのけにや、和泉式部、罪深かりぬべき人、後の世助かりたるなど聞きはべる

こそ、何事よりもうらやましくはべれ」：

と評され、『古本説話集』注4でも、

また、書写の聖の許へ、

暗きより暗き道にぞ入りぬべきはるかに照らせ山の端の月

と詠みてたてまつりたりければ、御返事に、袈裟をぞつかはしたりける。病づきて失せむとしける日、その袈裟をぞ着たりける。歌の徳に後の世も助かりけむ、いとめでたき事。

というように、和泉式部が、歌徳を以て性空上人の導きを得、極楽往生できたことを賞賛している。

『無名草子』においても『古本説話集』においても、和泉式部は、直接、性空上人の許を訪れてはいない。又、前者の話では、性空上人は、式部の和歌に対し「袈裟」を贈つており、傍線部に「返しをばせで」とあるように、二人の間に贈答歌は成立していない。後者の話では、「御返事」とあるので、「袈裟」の他に、何らかの文が添えてあつ抑も『無名草子』注3においては、

書写の聖のもとへ、

暗きより暗き道にぞ入りぬべきはるかに照らせ山の端の月

の歌を書き付けるというあらすじに変容していく注2。

たことも想定されるが、ここでも上人の返歌は具体的に述べられることはない。

しかしながら、慶安五年（一六五二）刊『訳和歌集』や、承応二年（一六五三）刊『法花訳和集』には、和泉式部歌と並んで、性空上人の歌が掲載されている。

吉田幸一氏は『和泉式部研究』^{注5}の中では、静嘉堂文庫蔵『法花訳和集』（江戸末期写本）を例に挙げ、「本書は内閣文庫蔵『訳和歌集』と同書。」^{注6}○和泉歌『くらきより』の返歌たる性空上人の『かくはかり』一首は、本書に初出の歌であり、上人作の確証はない。」と述べられているが、『訳和集』は、現在二つの系統に分けられることが指摘されており^{注6}、内閣文庫蔵本（江戸初期写本）は第一系統、静嘉堂文庫蔵本は、承応二年刊本と同じ第二系統のテクストに分かれ。そして、次に挙げる性空上人の歌は、第一系統の『訳和集』には無く^{注7}、慶安五年刊本と承応二年刊本、それから承応二年刊本の写しと思われる静嘉堂文庫蔵本の『訳和集』にのみ存する歌なのである。したがって、上人の返歌が、もし『訳和集』初出であるとするならば、厳密に言うと、慶安五年刊本が最も古い例ということになる。

ここで、その歌を紹介しよう。これらは、慶安五年刊本の通し番号でいうと、175番、176番歌にあたる。

性空上人のもとへよみてつかはしける

雅致王女式部

175
くらきよりくらき道にそ入ぬへきはるかにてらせ山のはの月
返し

176
かく斗くらきにまよふ身なりともてらささらめや山のはの月

176番には、詠者名はないが、175番歌の詞書からみて、和泉式部の歌に応じたのは、性空上人と見てよい。この176番「かく斗くらきにまよふ身なりとも…」歌は、やはり吉田氏が述べるよう、『訳和集』初出の歌なのだろうか。和泉式部の「くらきより」歌と性空上人とのやりとりに関するエピソードを載せた文献資料を改めて検索してみたが、管見の限りでは、性空上人の「かく斗」歌を見出すことはできなかつた^{注8}。そこで視点を変え、中世の直談物と呼ばれる法華経注釈書では、どのように語られているかを見てみることにした。しかし、その前に先ず、室町中期、遅くとも文安三年（一四四六）以前に成立したと見られる説話、『三国伝記』（玄棟編）^{注9}、卷第八第二十「性空上人上東門女院相看事」を挙げておきたい。

：其ノ比ノ上東門ノ女院。自「花洛」為ニ相看懺悔ノ密ニ登書写寺給ヒケリ。上人此事ヲ早知給フ。或夕暮ニ御弟子達ニ被レ仰ケルハ。明日ノ午ノ時ニ八人ノ鬼是ヘ可レム。寺中ノ人去ヘシト曰ケレハ。上人御言ニ偽無^{ノト}思^フ故ニ人々皆逃隱^ニケリ。上人モ為ニ化導ノ鎮西ノ方下向有リ答ヘシトテ。持仏堂ニ入ラセ給ケル。御弟子ハ上人タニモ惶サセ給フ鬼。我等争^{テカ}面ヲ向ヘキト申セハ。我モ是ニ有^ル上^ハイタク怖畏アルヘキニ非スト仰アリ。サル程ニ女院ヘ和泉式部以下八人ノ女房達皆ナ輿ヨリ下^テ御坊ニ入セ給ヒケリ。婢嬪タル面容ハ如浮^ニ芙蓉^ノ曉浪^ニ。婀娜タル腰支^{ハ似タリ}乱^ニ楊柳夕嵐^ニ。李夫人カ媚楊貴妃力粧^{ヒ誠ニ}妙^ナ姿也。人々是^ヲ見上人ノ鬼ト仰セラレツルハ是ニヤ。妖物ナルラントソ恐ケル。上人筑紫下向由^ヲ答^フ。女院此ヲ聞召ニ。伽耶山ノ月俄^ニ傾キ。双樹林ノ花忽^ニ萎^{メル}御心地シテ言ケルハ。我業障深重^ノ故^ニ。其罪ヲ悔^テ適詣^テタル折節。御他行有ケル事ソ遠路モ進ントスルニ。有レトモレ志無レ力。是付モ女人ノ身程口惜

事ナシトテ。泣々立帰ラントシ給処ニ。御供ナリケル和泉式部。

上人御覽在トヤ。暗ヨリ暗キ道ニソイリスヘキ遙ニ照セ山ノ端ノ月ト。御坊ノ柱ニ書付テソ帰リケル。上人御覽シテ哀ニヤ思ヒ給ケン。遠ク延サセ給ケルヲ。呼ヒ返シ奉ツリ御対面有ケルニ。真如薰修ノ眉ニハ垂寂光八字ノ霜ヲ。実相累徳ノ首ニハ載テ惣持三冬ノ雪ヲ貴キ御在様也。女院ハ五障ノ女人何ニ修行シテ苦ヲ遁レ侍ルヘキト。御尋在ケレハ。上人云ク。法華經ヲ授給テ御經ノ箱ノ蓋ニ角ソ遊サレタル。

二ツ無ク三ツナキ法ト説ク故ニ五ノサハリアラシトソ思フ

女院ハ生々世々ニモ難レ値。無数曠劫ニモ難キレ聞。此經ヲ感得有テ泣帰給ケリ。：

『三国伝記』において、和泉式部は、上東門院のお供の一人として書写山へ参詣したことになつてゐる。初め、筑紫下向と称して、上東門院達に对面しなかつた性空上人が、御坊の柱に書き付けてあつた和泉式部の「くらきより」の歌を見て哀れに思い、一行を呼び戻して対面し、上東門院に法華経を授け、さらに経箱の蓋に「二つ無く三つなき法と説く故に」との歌を贈つてゐる。したがつて、「二つ無く」歌は、上東門院の「五障ノ女人何ニ修行シテ苦ヲ遁レ侍ルヘキ」という問い合わせと説く故に」との歌への直接の返歌ではない。ちなみに、この「二つ無く」歌は、『宝物集』においては、和泉式部の歌として知られる。『法華経』の「方便品第二」の中の「十方佛土中 唯有一乗法 無二亦無三」と「提婆達多品第十二」の中の「又女人身 猶有五障」を踏まえたものである。^{注10}。

二 直談系法華經注釈書

觀海作の『一乘拾玉抄』（明応二（一四九三）写）^{注11}には、

物語——一乘院時キ泉式部ト遊女アリ書写ノ性空上人ハ参リ上人奉聴可成仏一云テ参ルニ上人無ニシ御対面一式部申様ハ上人御対面無キハ我等女人ナル故也トテ哥ヲ奉ケル也冥キヨリ冥キ道ニソ入リスヘキハル力カ力ニ照セ山ノハノ月 上人難有ト思召シテ御対面アリ其時式部尋申様ハ女人ノ凡身成仏ハ法花ニハ何ノ文テ候哉ト上人答テ云ク無ニ亦無三也云 式部哥一無レクニ無レキニツ法リト聞ク時ハ五ツノ障アラジトソ思フ

とあり、ここでは、上東門院のお供ではなく、「遊女」和泉式部が、自ら書写の性空上人の許へ参り、対面しようとしたが断られ、「くらきより」の歌を奉つたところ、その歌才が認められて、対面が叶うといふ筋書きである。式部の問い合わせに性空上人は、「無ニ亦無三也云」と答えるのみで、上人の歌はなく、「二つ無く」歌は、式部の詠んだ歌とされてゐる。

次に尊舜作の『法華經鷲林拾葉鈔』（永正九年（一五一二）作）^{注12}は、

物語云一条ノ院ノ御宇和泉式部ト云内裏女房有レ之參書写山ノ性空上人ニ可レ奉レ拝由ヲ申ス上人無ニ御対面其時奉ニテ一首哥嘆申哥云闇キヨリ闇キ道ニソ入ヌヘキ遙ニ照セ山ノ端ノ月上人御哥ヲ御覽有テサテハ法華經ノ從冥入於冥ノ心ヲ讀也トテ感嘆有ニ御対面有ニ云時彼女房奉レ向云法華經ノ内證如何上人答云無ニ亦無三也云哥云

二ツナク三ツナキ法ヲ聞時ハ五ツノ障アラシトソ思フ

多少簡略化されてはいるものの、話の筋は、先ほどの『一乘拾玉抄』

とほぼ同じである。ただし、『一乘拾玉抄』で「遊女」と称された式部は、『法華經鷲林拾葉鈔』では「内裏女房」と記されている。

そして、栄心作の『法華經直談抄』（天文一五年（一五四六）^{注13}）では、別の話も加わって、さらに詳しく語られる。

従冥入於冥ノ文ニ付テ物語有リ昔シ高尾ノ辺ニ貧僧一人有リ或ル夜寒サノ余リニ云様ハアラサムヤ播磨ノ書写ノ聖宮上人ハ何カニ播磨紙ヲ多ク御持テ有ルラシ是レカナフスマニシテキテ念佛セント云ケリ夜明ケレハ早朝ニ法師一人紙ヲ持テ來リ此ノ貧僧與テ虛空ニウセヌ是即聖宮上人ハ六根淨ニ叶給故ニ書写ニテ聞給故也此由一條ノ院ノ御宇ニ上東門院后キ伝ヘ聞給頓テ御供ノコシ七丁ニテ参詣シ給也上人ハヤ此事ヲ知給テ云様ハ今日鬼カ七人可來アル若シ我ヲ尋ハ西国辺ヘ下りタル由ヲ可云ト内ニカクレ給ヘリ其日ハ女房七人來タリ同宿思様ハ此事ヲ鬼カ七人可トハ來ル仰ケル歟ト思テ上人ノ仰有リツル様ニ返事シケリ無曲ト都ヘ御上リ可キニ有ル定ル時泉式部モ御供ノ女房ニテ有リケルカ哥ヲ讀スリクラキヨリクラキヤミニソ入ヌヘキハルカニテラセ山ノハノ月トヨメリ上人ハ折節持仏堂ニテ從冥入於冥ノ文ヲ讀誦トテ聞キ合テ不思議ヤト思召し出合対面シテ法花一部ノ大綱アラヘリ令説キ聞一被申一時キヘ此經ハ十方仏土中無二亦無三ト説ク時ハ女人モ惡人モ草木國土悉皆成仏ト見タリト説給ヘリ其時キ後キ此ノ旨ヲ聽聞テ哥ニツナク三ナキ法トキク時ハ五ノ障アラシトソ思ク又泉式部モ草木モ可成仏ス説給ヲ聞テ本尊ノ觀世音ハ生木ノ桜ニテ御座事合シヨメリ草木モ仏ニナルト説ク法ノマコトアラワス山桜カナヘ女人鬼ト云事ハ大經ニ女人ハ地獄ノ使ト説ケリ

前半部は、貧僧の話。そして後半部は、前半部の話に興味を覚えた上東門院が、先に挙げた『三国伝記』と同様、女房達を引き連れて、性空上人の許へ参詣するが、上人は、「鬼」がやつて来るといって、

持仏堂に隠れてしまう。仕方なくお供の和泉式部が「くらきより」歌を詠むと、折しも持仏堂で「従冥入於冥」の文を読誦していた上人は、奇妙な一致を不思議に思い、一行と対面し、女人も悪人も草木国土も悉く皆成仏することを説く。『三国伝記』においては、上人が「二つなく」の歌を詠んでいたが、ここでは上東門院が、「二つなく」の歌を詠み、和泉式部は、「草も木も仏になると説く法のまことあらわす山桜かな」という歌を詠む。「草も木も」の歌は、『一乘拾玉抄』や『法華經鷲林拾葉鈔』には見られなかつた和歌であり、『法華直談抄』は、他の二つの注釈書とは趣を異にする内容となつていて。

最後に、『訳和集』の編者である実海（一四四六年～一五三三没）が著した『轍塵抄』（大永六年（一五二六）^{注14}）は、廣田哲通氏によつて指摘されているように^{注15}、各品の冒頭歌が『訳和集』にほとんど重なるもので、前出の中世直談物の法華經注釈書系における和歌とは、様相が異なるといわれているものなのであるが、

性空上人讀テ遣シケル

雅致女式部

閻ヨリ閻道ニ入ヘキハルカニテラセ山端ノ月

というように、和泉式部の歌のみで、上人の返歌は見られない。

以上、直談系の法華經注釈書に現れる、和泉式部の「くらきより」歌に関する話を辿つてみたが、結局、慶安五年刊本『訳和集』を遡る文献に、「かく斗くらきにまよふ身なりとも」という性空上人の返歌を見出すことはできなかつた。

三 『訳和集』以後

しかしながら、『訳和集』刊行以後、寛文十三年（一六七三）刊の

『科註絵入 法華經かな新註抄』（嘯月子著・内題は、「科註妙法蓮華經鈔」）^{注16}には、性空上人のもとへよみてつかはしける

性空上人しゃうぐう雅致女式部これむねむせめしきぶ

拾遺哀傷しやくいじやうじやうの端の月のばたのつきくらきよりくらきみちにぞ入ぬべきはるかにてらせ山

返し

かくばかりくらきにまよふ身なりともてらさざらめや
山のはの月

とあり、又その他に、吉田幸一氏の『和泉式部研究二』にも挙げられていて、近世における釈教歌注釈書として最大の『類題法文和歌集注解』（寛政二年（一七九〇）成立・畠中多忠編）に、^{注17}従冥入於冥

拾遺

くらきよりくらき道にそ入ぬへきはるかにてらせ

山のはの月

返し

かくばかりくらきにまよふ身也ともてらさざらめや

和泉式部

と、取り上げられている。初めにも引用したが、吉田氏は、この「かくばかり」の歌について、「上人作の確証はない」と述べられている。

確かに、現時点では、慶安五年を越る文献に「かくばかり」歌が全く見られないということは、性空上人作の可能性はかなり低いであろう。歌のことばかり見ても、「くらき」や「山のはの月」は和泉式部の歌からそのまま援用しているし、歌の解釈もいたつて素直である。この

歌の詠作はさほど難しいものではなかつたと思われる。しかし、『訣和集』以後の作品にも「かくばかり」の歌が取り上げられているということは、当時の人々が、この歌を性空上人の詠んだ歌として、認識していたと言えよう。

四 「かくばかり」以外の性空上人の返歌

さて、これまで述べてきた「かくばかり」の歌以外に、和泉式部の「くらきより」歌に対する別の返歌が、もう一首存在する。先に挙げた『科註絵入 法華經かな新註抄』より少し遡つて、寛文元年（一六六一）刊の仮名草子『本朝女鑑』（浅井了意？）^{注18}には、やはり上東門院に随行して播磨の書写山に性空上人を訪ねるも、対面を断られて泣く泣く下向する時、和泉式部が、御堂の柱に歌を詠んで書き付ける話がある。

くらきよりくらきみちにぞいりにける
はるかにてらせ山のはの月

上人たちいでみをくり給ふが。このうたをみて。かきりなくかんじつゝ。よびかへしたてまつりて

日はいりて月まだいでぬたそかれに

かゝげててらすのりのともしび

と。よみたまひて。さまぐほうもんどもときて。御けうけりけるとなり。しやかを日にたとへ。みろくを月になぞらへ。二ぶつのちうげんに。人をみちびくところ。みのりのともしびにあらずは。まよひのやみはいかでかてらすべき。まことにありがたきうたにこそ。しきぶがうたは。しうゐわかしうにいれ

られたり。

また、他に同じ話が、寛文十年（一六七〇）刊『日本名女物語』（作者未詳）^{注19}にあり、さらに、享保十一年（一七二六）刊『西国三十三處觀音靈場記』（厚誉撰）^{注20}、天保十二年（一八四一）刊『女訓姿見女前訓解種』（手島堵庵編）^{注21}、弘化二年（一八四五）刊『觀音靈場記図絵』（厚誉撰・辻本基定画）^{注22}にも、「日はいりて」の返歌が見える。ただし、この歌に関しても、吉田氏は、『日ハ入りテ』一首は、寛文元年板『本朝女鑑』以来、性空上人の作とされてゐる」と注記されており、これまた性空上人作の確証は得られないである。

五 結び

以上、和泉式部の「くらきより」歌にまつわる性空上人とのやりとりを辿ってきた。和泉式部は初め、「くらきより」の歌を詠んで、書写的性空上人の許へ遣つたが、時代が下ると、式部単独で、或いは上東門院の従者として、実際に書写山に参詣する話へと変容する。そして「くらきより」の歌を契機に性空上人との対面が叶い、法華經の教えを授かることになる。

美女の誉れ高く、恋多き女性であつた和泉式部は、それ故に、「遊女」とか、仏道修行を妨げる「鬼」とか称せられているが、そのような罪業深き女性でも、歌徳によつて、極楽往生し、「後世」で救済されているということは、五つの障りがあるとされながらも、信仰に篤かつた女性たちにとつては、誠に羨ましく、尊敬の対象でもあつたにちがいない。

そのような和泉式部の「くらきより」歌に、返歌が存在するという

のはどういうことを意味するのか。今現在、近世以前に用例の見あたらない、『訳和集』所収の、

かくばかりくらきにまよふ身なりとも
てらざゞらめや山のはの月

と、『本朝女鑑』等に見える

日はいりて月はまだいでぬたそかれに

かゝげててらすのりのともしひ

の二首は、性空上人の作ではなく、おそらくは後の人気が詠作し、補つたものであろう。しかしそれをあえて性空上人作として和泉式部との贈答歌としたのは、女人往生・女人救済というテーマをより現実的、かつ鮮明に浮かび上がらせるためではなかつたか。識者の御示教を仰ぎたい。

注

1 引用は、『新編國歌大觀第一卷 勅撰集編』（角川書店・昭和五八年）に拠る。
2 吉田幸一『和泉式部全集 本文篇』七二八頁『和泉式部』（奈良絵本・室町末期古写本）では、「くらきよりくらきみちにそ入にけるはるかにてらせやまのはの月」、七三六頁『いつみしきふ』（お伽草子板本）では、「くらきよりくらきやみぢにむまれきてさやかにてらせ山のはの月」となつてゐる。

3 引用は、新編日本古典文学全集『無名草子』（小学館・一九九九年）に拠る。
4 引用は、新日本古典文学大系『古本説話集』（岩波書店・一九九〇）に拠る。
5 引用は、吉田幸一『和泉式部研究』（古典文庫・昭和四二年）七四一頁四行～七行。

6 詳細は『文献探求』第三九号四七頁下段～四八頁を参照されたい。

近年紹介・翻刻された、室町後期写とみられる、日本大学総合学術センター所蔵『訳和歌集』（『語文』第百十一輯、百十二輯・日本大学国文学会・平成十三、十四年）にも性空の返歌はない。

8 資料を検索するにあたり、次のものを参考した。

- ・吉田幸一『和泉式部全集 本文篇』（古典文庫・昭和三四年）
- ・吉田幸一『和泉式部研究 一、二』（古典文庫・昭和三九、昭和四二年）
- ・境田勝雄 等編『増補改訂 日本説話文学索引』（清文堂出版・昭和四九年）
- ・徳田和夫『お伽草子事典』（東京堂出版・一〇〇一年）
- ・『日本古典文学大辞典』（岩波書店・一九八三年）
- ・『國文學 解釈と教材の研究』第三五卷一二号（學燈社・平成二年一〇月号）
- ・『新編国歌大観』CD-ROM（角川書店）
- ・和歌史研究会編『私家集大成』（明治書院・昭和四八年）
- ・萩谷朴『平安朝歌合大成』（昭和三年）
- ・佐佐木信綱『日本歌学大系』（風間書房・昭和三年）
- ・久曾神昇『日本歌学大系 別巻』（風間書房・昭和三四年）
- ・太田為三郎編『日本隨筆索引「増訂版」』（岩波書店・昭和三二年）
- ・ 同 『続日本隨筆索引』（岩波書店・昭和三八年）
- 9 引用は、『大日本佛教全書 第九十二巻 築集部』（講談社・昭和四七年）三〇七頁。
- 10 引用は、坂本幸男・岩本裕訳注『法華經 上・中』（岩波文庫・一九六二年）に拠る。
- 11 引用は、『一乘拾玉抄 影印 叡山文庫天海藏』（臨川書店・一九九八年）に拠る。
- 12 引用は、『法華經鷲林拾葉鈔 二』永井義憲解題（臨川書店・平成一三年）の慶安三年（一六五〇）刊本に拠る。

13 引用は、『法華經直談抄 古写本集成』（臨川書店・一九八九年）の内、叡山文庫金台院藏本に拠る。

14 引用は、叡山文庫天海藏『轍塵抄』（請求番号：天4／12／79）に拠る。

15 廣田哲道『中世仏教説話の研究』（勉誠社・昭和六二年）

16 同 『中世法華經注釈書の研究』（笠間書院・一九九三年）

高木豊氏は、「嘯月『科註妙法蓮華經鈔』引載和歌考」（『日蓮とその教団』・吉川弘文館・平成二一年）の中で、この注釈書に『法華訳和集』が引載されていることを指摘されたが、「嘯月が稿本または写本『法華訳和集』を閲覧引載したか、刊本『法華訳和集』を閲覧引載したかは、現時点では確認出来ない」（三四四頁）と述べられていた。確かに種々問題点は残されているが、性空上人の返歌が見られることから、刊本『法華訳和集』を閲覧引載した可能性が高い。

17 引用は、塚田晃信 編『類題法文和歌集注解 一』三一二頁（古典文庫・昭和六〇年）に拠る。

18 引用は、吉田幸一『和泉式部研究 二』（古典文庫・昭和四二年）五三八頁に拠る。

19 同 同 同

20 五四一頁
一二七頁

21 八二頁

22 一二六頁

付記 本稿をなすに当たり、貴重な典籍の閲覧許可を賜りました叡山文庫に深く感謝申し上げます。

み草のみしけき濁にみしかともさても月すむ江にこそ有けれ
羅漢の仏になりかたきを濁水に月のやとら

ぬにたとへてよめりされともいまにこらすして（一六・オ）
月すむとなり

【校異】（一五・ウ）⑧右京大夫秀能—季能「内」、⑨濁に—濁と「内」、

⑩有—ナシ「内」、⑪仏になりかたき—成仏しかたき「内」、（一
六・オ）①たとへてーたとへ「内」、①いまにこらすして—今は
濁すみて「内」、②となりよしと也「内」

後嵯峨院御製

ふけゆかは出へき月と聞からにかねて心の闇そはれぬる

いま靈山にして成仏の記にあつかりて未來無

数劫をへて後八相成道せむ事をふけて月

のいつるといへりかねてそのよしを聞侍るにい
まより心の闇はれぬといふよしなり

【校異】（一六・オ）④闇—黒「内」、⑦よし—はし「内」、⑧闇—黒「内」

読人しらす

行末を聞うれしさにこしかたのうかりしよりもぬるゝ袖かな

ゆくすゑをきくとは未来に作仏すへしとの
記なりこしかたのうしとはよりく仏になるへか

らすときらはれし事をいへり袖ぬるゝとは隨
喜の涙なり

【校異】（一六・ウ）②なるへからす—成ましき「内」

法印公超

事をそぶる物こそなけれどももあるはさなから法の里人
迦葉尊者仏となりて出給はむ国をは光德国

（一七・ウ）

因縁を結ひ侍しかいまに朽すして来世に
作仏すへしとの給ふを承ていとく仏の
恩ふかき事を感したるよし也

【校異】（一六・ウ）⑥迦葉目連—迦葉目連等「内」、⑥声聞たち—声聞

過去「内」、⑧作仏すへしとの給ふを承ていとく仏の恩ふかき事を
—作仏恩ふかきを「内」
於二未來世一咸得ニ成仏一のこゝろを

俊成（一七・オ）

いか斗嬉しかりけむさらてたに浮世の事のしらまほしきに

これも未來作仏の事なるへし

【校異】（一七・オ）①俊成—皇太后宮大夫俊成「内」、②浮世の事の—こ
ん世のことは「内」、③事なるへし—こと也「内」

定家

行末はつゐに仏のくらひ山かひある名をやけふは聞らん

來世に教主となり侍らん國の名ならひに仏
の御名までも一と聞ゆへに位と名とはいへり

【校異】（一七・オ）④定家—平時国「内」、⑥仏の御名—仏号「内」、⑦
位と名とは一位にかひあり名とは「内」

無レ有ニ魔事の心をよめり

前大僧正慈鎮

といはむ仏の御名をは光明如來と名つくへしとなりされはその国には魔障あるへからすとみえたりあるも又仏法をまほらんと願をたて侍れはあるはさながら法の里人といへるなり

【校異】

(一七・オ) ⑧無レ有ニ魔事一無在魔事「内」、⑧の心をよめり
一ナシ「内」、⑩事をそふる一事をさぶる「内」、⑩あるは—あら
は「内」、(一七・ウ) ①迦葉尊者—迦葉尊者の「内」、③され
一さて「内」、⑤いへるなり—いへり「内」

心尚懷^{ハコトヲ}のこゝろを

すゝみゆく法の衣のいかならんうらやましきにぬるゝ袖哉

目連の記別をこひ奉る詞なりかゝる法花經

の会座につらなりてまれなる法をきくと

いへとも作仏すへしひきかぬあひたはなをうれ (一八・オ)

ひをそぶるこゝろありと也

【校異】

(一七・ウ) ⑦のこゝるを一ナシ「内」、⑧すゝみゆく—すゝき行
「内」さとりゆく「承」、⑧法の衣のいかならん—法の衣やいかな
らん「内」人はふたりになりにけれ「承」、⑨目連—自連^日「内」、
⑨こひ奉る—こふ「内」、(一八・オ) ①うれひ—うれへ「内」、②
をそぶる—そるゝ「内」

化城喻品^{ケシヤウブン}
觀^{クハスルコトカノクランヲナラシコントシ}彼久遠^{ヨリ}猶^{クラキル}如^ニ今日^{ニチ}の心を読侍りける

前大僧正慈鎮

れ

する墨のいふはかりなきいにしへもけふかきつくる心ちこそす
過去に好成國といふ國に大通智勝仏と申
仏いて給ひきいまの釈迦の御世より是をはか

らは三千大千世界の大地を墨として東方

より千の国を過て彼墨をつくさむされは
その墨つけたる国又あひたにつけぬ國をみな
抹して微塵^{ミヅル}となして一微塵を一劫とし侍
らんよりなを過たらんとなりされとも如來

の仏眼^{ムツヅル}をもつてみそなはすに彼時をも今日

のことしといへり教主釈尊西方の弥陀東方の
薬師と申も彼御ほとけの因位にての子

にてわたらせ給へり迦葉舍利弗等のもの

くの声^{シヤウモン}聞たちをはかの昔より教化しそめ

しといはむかためにかくのことくたとへ給へり

【校異】

(一八・オ) ⑤彼^カ後「内」、⑤の心を読侍りける一ナシ「内」、
⑧といふ—といひ「内」、⑨いまの—今「内」、⑨御世—御代「内」、
(一八・ウ) ①過て彼墨^{すみ}をつくさむされはその墨つけたる國—過
ては點をうち又過てはうちして彼墨をつくして其墨つけたる「内」、
②つけぬ國—つけぬ國とも「内」、④となり一ナシ「内」、⑤彼時
をも—彼遠きも「内」、⑦薬師と申も—醫王と侍るも「内」、⑦子

従^{ヨリ}冥入^{クラキル}於冥^{クラキ}の文をよめり
(一九・オ)

頼むへし闇よりやみにうつるとも影にかけそふ月も出なむ

諸仏出世のとをき時は善趣は滅して悪道は
増長するかゆへに生る衆生やみよりやみ
ちに入てまよふ事はなはたしとなり

【校異】 (一九・オ) ①の文をよめりナシ「内」、③諸仏—諸仏の「内」、

③悪道—西道「内」、④するかゆへに—する故に「内」、④やみよ
りやみちに入て—くらきよりくらき道に入て「内」
性空上人のもとへよみてつかはしける

雅致王女式部

くらきよりくらき道にそ入ぬへきはるかにてらせ山のはの月

【校異】 (一九・オ) ⑦王女—女「内」

返し

かく斗くらきにまよふ身なりともてらささらめや山のはの月

【校異】 (一九・オ) ⑧—⑨ 176番歌—ナシ「内」

入道二品親王尊円

(一九・ウ)

五月やみ木のした闇はくらきよりくらきにまよふ程そくるしき
【校異】 (一九・ウ) ②闇—道「内」「承」、②程—道「承」、(左注ナン)
—同前「内」
以モツテタインヒノチカラヲトシ五ヘクナウノシヨンヤウヲ
以二大慈悲力一度二苦惱衆生一の文をよみ侍り

俊成

世中にくるしき道はあはれみのちから車のはこふなりけり

ほとけの慈悲を車にたとへたり

【校異】 (一九・ウ) ③の文をよみ侍りける—ナシ「内」、⑤世中に一世中

の「承」、⑥慈悲を—慈悲心をもつて「内」、⑥たり—侍り「内」
ネカクハモツテコノクトクアマネクヨボン イツサイニワレラトト シュシンヤウ ミナドモニ
願以二此功德一普及於一切我等与衆生一皆共

世中にくるしき道はあはれみのちから車のはこふなりけり
ほとけの慈悲を車にたとへたり

みちとをみ半天にてや帰らまし思へはかりの宿そうれしき

【校異】 (一〇・オ) ⑧半天—中空「内」

康資王母

源光俊

ゆくへしといひてそつみに帰らましひなの長路に宿なかりせは

【校異】 (一〇・オ) ⑨源光俊—光俊朝臣「内」、⑩ゆくへし—行えし「内」、
長イ

⑩長路に—今路の「内」

おこなひのはてにとなふることわさをうけゝる袖や天のはこも

彼文は大通仏のみもとへ梵天王まいり給ひて色 (一〇・オ)
くの花をさゝけ種々の宮殿を奉りて供養

をのへて後廻向し侍し文なりされはいまも

これをとなふるなり如來のうけたまへるもあま

ねかるへしといふ心を天の羽衣といふなり

シ「内」、⑩ことわさ—ことくさ「内」「承」、⑩うけゝる—うへ

る「承」、(一〇・オ) ①彼文は—彼偈の文は「内」、①大通仏の

みもとへ—大通のみもとへ「内」、①梵天王—梵天王の「内」、

②種々—数々「内」、④これをとなふるなり—是をよろつのおこな

ひの終にはとなふる也「内」、④あまねかるへし—あまねく有へし

「内」、⑤といふなり—となり「内」

化城宝所の譬の心を読侍りける

ケジヤクボシヨ

こしらへてかりのやとりにやすめすはまことの道にいかでいら
まし

【校異】 (一一〇・ウ) ②道にいかでいらまし一道をいかでしらまし「承」

大僧正慈鎮

のりの道にけふかり初の草枕結ひし末の宿そうれしき

【校異】 (一一〇・ウ) ④集付ナシ一後拾「内」、④かり初の一かり初に「承」

思ふなようき世中を出はてゝやどる奥にも宿は有とは

【校異】 (一一〇・ウ) ⑤宿は一宿そ「内」、⑤有とは一有けり「承」

西行法師

やすむへき宿と思へは半天の旅もなにかはくるしかるへき

【校異】 (一一〇・ウ) ⑦宿と一宿をは「承」、⑦思へは一思へ「承」、⑦半

天一中空「承」

源三位頼政

かりのやにしやはしやすむるしるへあれはつゐにまことの道にき
にけり

【校異】 ナシ

円世法師

かり初の宿ともしらて尋こしまよひし道そしるへなりける

(一一一・オ)

【校異】 (一一一・オ) ①集付ナシ一新後撰「内」、①まよひし一迷ひの「内」

まよひそ「承」、①道そ一道の「承」

かりのやにたどぶる法をあふけともしはしやすめぬ身のうれへ

【校異】 (一一一・オ) ②定家一前中納言定家「内」、③かりのやかりの宿

「承」、④あつて一有て「内」、⑤いたらん一いらん「内」、⑥先達達

彼たとへの心はたとへは人あつてたからの山に
いたらんとせんにひとりの先達智恵才覚
あるをしるへとしてゆくにその道とをき事五
百由旬なりしかるにかのいたれるものとも三百
由旬をこえ侍りのこり二百由旬を過かたく
てつかれはてぬそれよりさきへはなかくに
すゝむへからすと申時に先達中途にか
りの都をしつらひ侍りてはやこゝこそ宝の
都そといふにみな悦あへりさてよくくやす
めをきて後かの先達申けるやう是はあま
りにつかれ給へは方便して城とはいひつれ
ともしからずいま三百由旬を尽してまこと

(一一一・オ)

の宝の山に入とていさなひ侍りて思ひのまゝ
にいたらしむと也かの先達と申は釈迦ほとけ
也もろノハの人は声聞たち也三百由旬の険
難とは三界のうちの煩惱有漏の境なり

かりの都とは根機の及にしたかひて小乗の
法を説て羅漢の位にのほらしめ給ふとなり
こゝもとにしはしやすめて其後三界の外の
無明のまよひをつくして真実大乗の道に
かなひさとりをひらかしめ給ひし事なり

(一一一・オ)

をしへ置露のかことを使ひてひとつ草葉にやどる月影

定家

(一三一・ウ)

【校異】 (二二一・オ) ⑥三の卷—三卷「内」、⑦心を夏に—心をよみて夏に
「内」、⑦読侍りける—ナシ「内」、⑧定家—前中納言定家「内」、
⑨なきつる—たつねる「承」、⑨まとはまし—まよまし「内」、⑩
かりの都—化城「内」、(二二一・ウ) ①郭公と—時鳥を「内」
在々諸仏土常与レ師俱生といふ心を

蓮生法師

郭公なきつる嶺もまとはましかりねやすむるしるへならすは
是もありねやすむると侍るばかりの都の事也
夏によるゆへに郭公といへるか

(二二一・ウ)

母の周忌に法花経をみつから書て卷く
の心を読んで表紙の絵にかゝせけるに三の
巻の心を夏によせて読侍りける

定家

【校異】

定家

ひと度縁を結ひて後は影の形にしたかふ
かことく衆生と仏とはなるゝ事なしと也
【校異】 (二二一・ウ) ②生シヂスといふ心を—王といふことを「内」、⑤した
・ウ ③かの先達サムライ申するやう—かれらに申様「内」、③是は—是
は各々「内」、④城—都「内」、⑦いたらしむと也—いたらしめ
しどそ「内」、⑦と申ナシ「内」、⑧もろくのひと—諸人「内」、
⑧陰難ケンナン—除難「内」、⑨有漏ウラウ—有為「内」、(二二一・オ) ①のほら
しめ給ふとなり—とらしめ給ふこと也「内」、②しはし—しめし
「内」、③まよひ—まとひ「内」、③眞実シンジツ—眞実の「内」、④かな
ひ—かなふ「内」

みぬむかしはるかに結ふ岩代の松の契エクもいまやとくらん
岩しろの結ひ松といふ事の侍るを昔縁エビンを
結ひしにとりあはせ侍る也たゞし岩代の松は
むすひて後とき侍らさりしかされは今シテの声シテ聞
たちは法花をとくにあへるゆへに契もいまや
とくらんといふかもの字らむの字に心をかけ
給ふなり

(二二一・オ)

【校異】

定家

(二二一・ウ) ⑦の心を—ナシ「内」、(二二三・オ) ②されは—さて
「内」、③法花をとくに重と法を説に「内」、④らむ—らん「内」、
④かけ給ふなり—かけて見給ふへし「内」

定家

【校異】 (二二一・オ) ⑥三の卷—三卷「内」、⑦心を夏に—心をよみて夏に
「内」、⑦読侍りける—ナシ「内」、⑧定家—前中納言定家「内」、
⑨なきつる—たつねる「承」、⑨まとはまし—まよまし「内」、⑩
かりの都—化城「内」、(二二一・ウ) ①郭公と—時鳥を「内」
在々諸仏土常与レ師俱生といふ心を

第四卷五百弟子受記品

前大僧正慈鎮

【校異】 (二二三・オ) ⑦受記シユキ—ナシ「内」、⑧といふ文をよめる—といふ心
山の端の月にそのりしはしこの野へ行鹿にかかる小車
内秘ウチニヒシテホサツノキヤウヲホカニハケンスコフシヤウモソ—菩薩行ボサツヨウ—外現エクセン—是声聞シテイシム—といふ文をよ
める

前大僧正慈鎮

【校異】

定家

(二二三・ウ)

定家

いにしへの鹿なく園の庵にもこゝろの月はくもらさりけり
其不レ在ニ此会ニ汝當ニ為宣説のこゝろを

ソレサフニハアラコノエニナシマサニタメニセセツ
前大僧正慈鎮

ナシ——おなし「内」

右近中將良経

ひとりのみくるしき海を渡るとや底をさとらぬ人は見るらん

【校異】（二三・ウ）③右近—左近「内」

前大僧正道宝

したにすむもとの心をしらぬ哉野中の清水み草ゐぬれは

【校異】（二三・ウ）⑥集付ナシ—新後撰「内」、〈左注ナシ〉—経文の心

あらはなり吟味し給ふへし「内」

五百品のこゝろを

定家

恋しとてこかるゝ色もあらし吹はゝその原に人もやとらで

富樓那尊者法明如來となつて来世に善

（二四・オ）

淨國と申國にて成道すへし其国には女人

あるへからす一切の人みな化生せむといへり

しかも定家卿の母のために経供養せしと

きの哥なれば誠にいひあはせ侍るか

【校異】（二三・ウ）⑦五百品のこゝろを—五百弟子品心を「内」、⑧定家

—前中納言定家「内」、⑨色も一色を「内」、⑩その原—そか原「承」、

⑪なつて一名乗て「内」、（二四・オ）①成道—成仏「内」、②

いへりしかも一いへる有其原に人のやとらぬとは是也「内」、④なれば一也「内」、④いひあはせ侍るか—似合侍る歟「内」

袖のうへの珠を涙と思ひしはかけむ君にあはぬなりけり
【校異】（二四・ウ）⑤定家—ナシ「内」少僧都源信「承」、⑥集付ナシ—
新勅撰「内」

法性寺入道前関白太政大臣

法の花ちるともうせぬ物なればけふみぬ人に猶もつたへよ
此品にて惣記とてもろくの声聞みな授記し
給へりもしたゝいまこゝもとに座せぬ羅漢
あらは迦葉尊者かくのことくいひつたへよとのた
まふなり
（二四・ウ）

五百品のこゝろを読侍りける

僧都源信

玉かけし衣のうらをかへしてそをろかなりける心をはしる

【校異】（二四・ウ）②五百品—五百弟子品「内」、②読侍りける—ナシ「内」、
④集付ナシ—新古「内」

定家

きてつくる人なかりせは衣手にかゝる玉をもしらすやあらまし

【校異】（二四・ウ）⑦法性寺—法成寺「内」「承」、⑦関白—撰政「内」、

(⑧)集付ナシ—同「内」、(⑧)かゝる—かくる「内」

僧正静円

吹かへすわしの山風なかりせはころものうらの玉を見ましゃ

【校異】 (二四・ウ) ⑩集付ナシ—金葉 「内」

祐成法師 (二五・オ)

立かへりとはすはいかゝからころもうらにかけたる玉もしらま
し

【校異】 (二五・オ) ①祐成—祐感 「内」、「承」、②集付ナシ—統拾 「内」

赤染衛門

酔のうちにかけし衣の珠そとも昔の友にあひてこそきけ

【校異】 (二五・オ) ④集付ナシ—玉葉 「内」、「④かけし—つけし 「内」

俊成

うらなりし玉とも兼てしらさりき醉さめてこそ嬉しかりけれ

【校異】 (二五・オ) ⑤俊成—ナシ 「内」、「⑥集付ナシ—後拾遺 「内」、「⑥

うらなりし—衣なる「内」、「⑥兼て—かけて 「内」

前大僧正快雅

嬉しさを袖につゝみし玉そともけふこそ聞て身にあまりぬれ

【校異】 (二五・オ) ⑦前大僧正快雅—前權僧正快雅 「承」、「⑧集付ナシ—

平恒正

衣手にありとしりぬる嬉しさに涙の玉も数そそひける

【校異】 (二五・オ) ⑨恒正—雅正朝臣 「内」、「⑩集付ナシ—玉葉 「内」、

⑩玉も数そそひける—玉をかけそゝへつる「内」玉をかけそそえ
つる「承」

206

性嚴法師 (二五・ウ)
いつかけし衣のうらの玉とたにしらてうき世に迷ひきぬらん

【校異】 (二五・ウ) ②集付ナシ—新拾 「内」、「②うき世—幾世 「内」

読人不知

をろかなる涙をかけて歎くかな衣のうらの玉をしらねは

【校異】 (二五・ウ) ④集付ナシ—同「内」

寂蓮法師

涙をや衣の玉と結ひけんありときよりぬるゝ袖かな

【校異】 (二五・ウ) ⑥集付ナシ—統古

九条左大臣

をろかなる心からこそ我袖にかけゝる玉を涙とはみし

【校異】 (二五・ウ) ⑦九条左大臣—九条左大臣女 「内」、「承」、「⑧集付ナ

シ—統千 「内」、「⑧みし—みれ 「内」、「承」

大僧正行尊

衣手につゝみし玉のあらはれてうらなく人にみゆるけふかな

【校異】 (二五・ウ) ⑨大僧正行尊—前大僧正行尊 「内」、「⑩集付ナシ—新

後撰 「内」

頓阿

(二六・オ)

よしさらはかけし衣も朽はてねうらなる玉のあらはるゝまで

【校異】 (二六・オ) ①頓阿—頓阿法師 「内」

法印成運

波かかる衣のうらをきてみればもにあらはれて玉そよりくる

【校異】 (二六・オ) ④集付ナシ—新千載 「内」

法印乘雅

213

212

204

203

202

201

などか我衣のうらのたまさかに法にあひてもさとらさり劍
〔校異〕 (二六・オ) ⑥集付ナシ—新後撰 「内」

西行法師

をのつからきよき心にみかゝれて玉ときかくる法をしりぬる

〔校異〕 (二六・オ) ⑧しりぬる—しるかな 「承」

法印憲実

まよひこし玉の行ゑもあらはれぬ身を空蟬のうすき袂に

〔校異〕 ナシ

前大僧正慈鎮

(二六・ウ)

袖のうへの露のまよひをうちかへし玉を衣のうらにみる哉

衣の玉の辟と申侍るは人あつて親友の家に

至て酒に酔ふしぬ親友時におほやけ事あ

りてよそへゆくへしとてあたひ限らぬ玉を

かれかきたる衣のうらにかけてさりぬその人

は惣て是をしらすして他国にゆきて衣食

のためにさまくの艱難にあへりすこしも

得る事侍れば足ぬとせり然して後親友

にふた度あへりその時親友の給ひけるは我む

かし汝をやすからしめんかために衣に玉をかけた (二七・オ)

りきその玉はいまにありをろかにしてしらすと

いふそのことく昔ほとけ羅漢たちを教化し

て一切智願の心をえせしめむとし給ふにその

心わすれはてゝしらすわつかに羅漢の道をえて

眞実の道とおもへり昔の一切智の願いまにう

いかにして衣の玉をしりぬらむ思ひもかけぬもある世に

〔校異〕 ナシ

権僧正永縁

かりけるよしの哥よみてかつてものに結ひつけ侍るをみて返しによみ侍りける

一切の——一切 「内」、⑩法花經—法花 「内」、(二七・ウ) ②よしなり—よし也此辟の心を見給ひて哥共を吟味し給へし 「内」

人のもとに經供養しけるに弟子品の心をと

けるに無価の宝珠のたとへを聞てたうと

り—よし也此辟の心を見給ひて哥共を吟味し給へし 「内」

せはてすして身にありといへり親友といへるは
釈尊なり人は声聞たちなり衣とはかれらか心に
信樂し慚愧するを二の衣とせり玉とは一切の
智いまの法花經これなりかゝるたからを身に
かけながら 賤もまつしくをくりよそに衣食をも (二七・ウ)

〔校異〕

(二六・ウ) ②玉を衣のうらに—衣のうらのたまを「承」、③あつて—ありて「内」、⑤とて—として「内」、⑧すこしも—若すこしも「内」、

(二七・オ) ②その玉—其玉は「内」、②あり—有て「内」、②をろかにしてしらす—おろかなり「内」、③羅漢たち—諸の羅漢たち

「内」、④願—ナシ「内」、④えせしめむとし給ふにその心—おこ

さしめ給ひたるに其心を「内」、⑥一切智の願—一切智願「内」、
⑧釈尊—釈迦世尊「内」、⑧人は—醉人は「内」、⑧声聞—らか

ん「内」、⑨信樂し—信樂「内」、⑨するを—する心を「内」、⑨

一切の——一切 「内」、⑩法花經—法花 「内」、(二七・ウ) ②よしなり—よし也此辟の心を見給ひて哥共を吟味し給へし 「内」

念珠をもとめうしなひて 朝にけさにま
つはれでありけるをみて

慈恵大僧正

(二八・オ)

夢さめて衣のうらを今朝みれば玉かけながら迷ひけるかな
【校異】 (二八・オ) ②けるかな—ぬるかな「内」

天台座主公豪

なかき夜に猶さてのみやすくさまし哀とみつゝをしへさりせは

【校異】 (二八・ウ) ⑥のこゝろを—ナシ「内」、⑦俊成—皇太后宮大夫俊世尊於長夜一常懲見教化のこゝろを
ナシ—新勅「内」、⑤枝—枝の「内」
セソンヨイテチャウヤニツネニカナシンドラレンケウケセ

あつめをく窓の螢よいまよりは衣の玉の光ともなれ
螢を窓にあつむとはかのひかりに映して書を
よむ古事つねの事なり又螢を玉のひかり

にせ侍る事あれはかくよめり

【校異】 (二八・オ) ③公—ナシ「内」、④集付ナシ—続拾遺「内」、⑤あ

つむ—あつむる「内」、⑦かく—よく「内」、⑦よめり—よみ侍るな

り「内」

住房の西谷に岩はあり定岩と名つく松

あり繩床樹といふもとは一枝にて座する

に便あり正月雪ふる日すこしひまある程

座禅するに松風はけしく吹て墨染の袖に霞

(二八・ウ)

ふり積て侍りけるをつゝみて石のうへをたつとて 衣

裏の明珠のたとへを思ひ出てよみ侍りける

高弁上人

松の枝岩ほの苔に墨染の袖の霞やかけししら玉

【校異】

(二八・オ) ⑧西谷—西の谷「内」西谷「承」、⑧定岩—定心石

「承」、⑨にて—にして「内」、①松風—松の風「内」、(二八・ウ)

①霞ふり積て— 雪ふりて「内」、③裏の一裏「内」、⑤集付

【校異】 (一・オ) ①訳和和歌集三—ナシ「内」法花訳和集三「承」、④色
も—いろと「内」、⑤羅睺羅尊者—羅睺羅尊者は「内」、⑦にして
—にて「内」、⑦しかも又—しかも「内」、⑨いまゝて—いたまた「内」、
⑩みち侍らす—満す「内」、(一・ウ) ①通王仏—道王仏「内」、

諸共に思ひそめる紫のゆかりの色もけふそしらるゝ
羅睺羅尊者ほとけのいまた太子にてわたら

せ給ひし時の御子なり俗の中にもつとも

おもし阿難尊者は又御いとこにしてしかも又

侍者なれば出家の中にはなはたすくれ侍りし

かるに彼二人いまゝて成仏の記にもれ給へば大

衆も 疑をなし又二人の願もみち侍らすされ

とも此品のとき阿難をは山海惠自在通王

仏となるへしとの給ひ羅睺をは踏七宝花

仏とならんと仰られし時われも人もねかひみ

ち 疑とけにけるをかくいへり

前中納言定家

訳和和歌集三
人記品

(訳和三・一・オ)

なまく夜に猶さてのみやすくさまし哀とみつゝをしへさりせは

【校異】 (二八・ウ) ⑥のこゝろを—ナシ「内」、⑦俊成—皇太后宮大夫俊

成「内」

訳和和歌集三
人記品

②との給ひ羅睺をは—羅睺羅をは「内」、③仰られし—の給ふ「内」
よみをき侍りける釈教の哥を熊野へ奉
りける中に人記品のこゝるを

法眼源承

我ねかひ人ののそみもみつしほにひかれてうかふ浪のした草
さきのことくに大衆も二人の授記にもれぬること
をうたかひをのくも不足にみ侍るところに
授記をきゝ奉りて我願既満衆望亦足の

(二・オ)

こゝろをかくいへり

【校異】 (一・ウ) ⑥人記品のこゝろを一人記品を「内」、⑨ことくに—

とく「内」、⑨授記—記「内」、⑨もれぬこと—漏ぬこと「内」、
⑩み侍る—思ひ「内」、(一・オ) ①既—既「承」、①のこゝろを—

といへる心を「内」
我願既満衆望亦足といふ文をよみ給ひける

前大僧正慈鎮

我ねかひみちて嬉しきまとひ哉誰ものそみのかなふ筵に

【校異】 (二・オ) ③我願既満衆望亦足といふ文をよみ給

ひける—ナシ「内」、⑤まとひ—円居「内」まとあ「承」
シヨミヤウナケンアルコトカリモテノアヘレミヨツ
寿命無レ有レ量以レ愍一衆生一故の心を

俊成

かきりなき命となるもなへて世のものゝ哀をしれはなりけり

阿難尊者仏とならせ給ひては山海恵自在
通王仏と申へし彼仏の寿命はかりなし

とみえたりいかなるゆへにかかるのことくあるとは(一・ウ)

ふに衆生おほくしてそれをあはれむゆへと
みえたり

【校異】 (一・オ) ⑥の心を—ナシ「内」、⑦俊成—皇太后宮大夫俊成「内」、

⑨阿難尊者—阿難尊者の「内」、⑨仏と—仏に「内」、⑩通—道「内」、
⑩寿命—寿命は「内」、(一・ウ) ①かくのことくあるとは—かく
あると云に「内」

メラレタネンセハコムリヤウノショフツボウコトシヨンニチノヨモモノ
令三レ我念二過去無量諸仏法如二今日所聞」と

いふ文を よみ人しらす

昔いま鏡をかけてしるのみか行末とても曇やはする

阿難護持仏法の徳とて仏の説をひと度

聞てわするゝ事なし今日釈尊の法のみな
らす過去の仏とことは侍者となつて
仏法を護持し給ふ事をかくいへり過にしかた

をもつて行末の事をかゝみ侍るに未来の

諸仏の法藏をもかくこそ護持し給はめと也

(三・オ)

【校異】 (二・ウ) ④(三・オ) ②(22番歌)—ナシ「内」
僧都源信

いにしへはをのかさまくありしかとおなし山にそけふは入ぬ
る

【校異】 (三・オ) ③(422番歌)—ナシ「内」、④けふ—今日「承」
前大僧正慈鎮

さきの世もなにかへたてむおなしときみな仏にしならんとすれ
ば

この品のをはりに二千人の声聞來世に十方

の国にて名もおなしく宝相如來と名のり
おなし時成道すへしと授記し給へるをお
なし山に入とはたとへいふなり

【校異】 (三・オ) ⑤～⑩ 〈229番歌〉 —ナシ「内」、⑥世も—ひと「承」

平久時

(三・ウ)

木のまより出てすむへき月影を待ときかする秋風の声
木のまをいつる月とは來世に作仏すへき二千
人なりすでに未來世なれは待としらするとい
へり

【校異】 (三・ウ) ①～⑤ 〈230番歌〉 —ナシ「内」

伝教大師

此法をたゞひとともとく人はどもの仏のつかひならすや
法花經の乃至一句をとく人もしるへしこの
人はすなはち如來の使なりともの仏とはもろ
くのほとけの使なりといふ心なり

(四・オ)

【校異】 (三・ウ) ⑥法師品—ナシ「内」、⑧どもの—もの「内」よもの

「承」、〈左注ナシ〉—「内」
又如來滅度之後若有有人聞二妙法花經乃
至一偈一句一隨喜者我又與二授阿耨
多羅三藐三菩提記のこゝろを読侍り
ける

前大僧正実聴

いはりのなきことの葉の末の露後の世かけて契をく哉
経文のこゝろ哥の中にあきらかなり

232

231

230

【校異】 (四・オ) ②妙法蓮花經「内」、③一念隨喜者
我叉与二授阿耨多羅三藐三菩提記のこゝろを讀侍り阿耨菩薩の心を「内」、⑤前大僧正—権僧正「内」、⑥集付ナシ—玉葉「内」、⑦〈左注〉—ナシ「内」

日吉の社にて如法經十種供養し侍りける
に法師品の種々供養のこゝろを讀ける

参議雅経

誰もけふひとくさならぬ花の香に露のかことや結ひ置らん

(四・ウ)

花を散し香をたき幡をほひ蓋をを
ほひなんとして此經を供養し奉るへしと也

【校異】 (四・オ) ⑧十種—ナシ「内」、⑧けるに—ける「内」、⑨讀け
る—ナシ「内」、⑩參議雅經一同「内」、(四・ウ) ②～③〈左注〉

—ナシ「内」
感二衆生一故生二於惡世一廣演一此經一といふ心を
俊成

これもこれうき世のためとむまれきてかくは御法をとくとそ
きけ
法花經修行の人はやかて淨土に生すへけれ
とも惡世の衆生をあはれむ心によりて濁れ
世に生て人のために此經をとき侍るとなり

俊成—俊成卿「内」、⑥これも—これ—これそこの「承」、⑦～⑨〈左
注〉—ナシ「内」

234

233

須由聞レ之即得レ究^{ハレ}竟阿耨菩提^{アクボタツバ}の心を

前大僧正公澄

(五・オ)

ひと声をきゝそめてこそ郭公なく夜ふかき夢は覺けれ

須由とは時節^{じせつ}のいとみしかき程なれはひと声

きくによそへたり無上^{ぼだい}菩提^{ボダヒ}を証する事は

さまゝの迷をつくしはつるをはりなれは夢さ

むるといへり

【校異】

(四・ウ) ⑩須由—須臾^{シユヨ}「承」、(五・オ) ②須由—須臾^{シユヨ}「承」、(3)

⑥〔左注〕—ナシ「内」

法花最^{ホヅケモツタ}第一^{モタイイチ}のこゝろを読ける

前大僧正慈鎮

春の花秋の野はらを詠捨て庭のはちすの花咲にけり
如來一代のあひた説給へる諸経をすべて已今
当の三説とせり花巖經より般若經までに
四十余年の経はすでに説をはれるを已説といひ
涅槃經^{ねはん}いまたとかさるを當説といひ無量義

(五・ウ)

経は法花同座の説なれば今説とすその中に
いまの法花経すぐれたれば最第一といふなり

【校異】 (五・オ) ⑦法花最^{ホヅケモツタ}第一^{モタイイチ}のこゝろを読ける—ナシ「内」、(8)

前大僧正—ナシ「内」、(9)春の花—春の山「内」、(9)捨て—すて「内」、(10)

シ「内」

ヤウ^ミシハ^ミウル^ハルツチドロ^ハケツチャウ^ハコトミ^ニニ^ハコロモ^ニ也^ハ
漸見^ハ二湿^ハ土泥^ハ一決定^ハ知^レ近^レ水^ハのこゝろを

俊成

むさし野の堀かねの井もある物を嬉しく水のちかつにけり

尋ゆく清水にちかき道そここれ御法の花の露のした影

定家

(五・ウ) ⑦俊成—皇太后宮大夫俊成「内」、⑧集付ナシ—千載「内」

【校異】 (五・ウ) ナシ—法師品 同「内」

(六・オ) ①²³⁹番歌—ナシ「内」

母の周忌に法花経をみつから書て卷^シ

の心をよみて表紙^{ヘラシ}の絵にかゝせけるに四

の巻のこゝろを

身をしほる山井の清水をとちかしきまた人に風や涼しき

是は穿^{せん}鑿^{さく}高原の辟^ハといふ事侍りたとへは人

あつて渴して水をえんかために高き岡を

ほりうがつにはしめの程はかはきたるつちのみい

てゝ水はなはたとをしと思ひていとゝはけま

してほるにすこしうるほへるつちをえたり

水ちかしとしりて猶やますもとむるによ

つてほるにすみたる水を得たりかはきうる

ほへる水は四十余年の説のことくすめる水は

(六・ウ)

【校異】 (六・オ) ナシ—四卷 夏 定家卿「内」、②^レ④^レ〈詞書〉—ナ

シ「内」、⑥^レ④^レ〈左注〉—ナシ「内」

柔和忍辱衣^{ニウツニンニハコロモ也}のこゝろをよみける

藤原伊信

我ためにうきを忍ふのすり衣みたれぬ色や心なるらん

【校異】

(六・ウ) ⑤のこゝろをよみける—ナシ「内」、⑥伊信—伊信朝臣

「内」、⑦集付ナシ—続拾遺「内」

前大僧正慈鎮

墨染の袖をとはゝや法のしにそれそまことの忍ふもち摺
ほとけ滅度し給ひて後の悪世に法花經を

ひろめんともからはみな柔和忍辱の衣を着

して違縁悪縁をも忍ふへしと也

【校異】 (六・ウ) ⑧前大僧正慈鎮—ナシ「内」、⑨それぞれ—それも「内」、

⑩～(七・オ) ②〈左注〉—ナシ「内」

カフトモタウチャウクワタコネンヒルカ
加二 刀杖 瓦石 念レ 仏故 応レ 忍の心を

寂然法師

ふかき夜の窓うつ雨の音せぬはうき世を軒の忍ふなりけり

【校異】 (七・オ) ③忍—ナシ「内」、④寂然—寂連「内」「承」、⑤雨の—

雨に「承」

ジャクマクシテナカラシヒトコヘトクシユセヨノキヤウテンラクメソトキニタメニケンゼン
寂漠無二人声一読誦此經典我尔時為現
シャウジャウノクワミヤクノミヲ
清淨光明身の心をよみ侍りける

俊成

とふ人の跡なき柴の庵にもさしきる月の光をそみる

【校異】 (七・オ) ⑦読三誦此經典—我尔時為現
トクシユセハコノキヤウテンラクレソトキニケンゼンシャウノミヲ
清淨

光明身—清淨光明身誦誦此經典我尔時為現「内」、⑦の心を

よみ侍りける—ナシ「内」、⑧俊成—俊成卿「内」、⑨集付ナシ—

新後撰「内」、⑨さしきる—さし入「内」、⑨みる—みつ「承」

僧都源信

闇晴ぬ人の心をさそぶとてうき世をめくる山のはの月

凡夫のまよひをつくし侍らぬために仏の光

心すむ草の庵の法の水うれしく月の影やさすらん

【校異】 (七・ウ) ⑥後京極—後京極摂政太政大臣「内」、⑦法の水—水に

又「内」、⑦うれしく—嬉しき「内」⑦さす—すむ「内」

前大僧正慈鎮

草のいほに声も心もすみぬへし人は影せぬ光をそみる
しつかなる所の人も影せぬ山林樹下にてひとり

此經をよみ侍らむとき釈尊かれかために

光明を現してその身を照すへしと也

(八・オ)

【校異】 (七・ウ) ⑧前大僧正慈鎮—ナシ「内」、⑨へし—らし「承」、⑨

参議雅経

しつかにて法とく人そたのもしきわれらみちひく使と思へは

【校異】 (七・オ) ⑩僧都源信—前権少僧都源信「内」

定家

静なるところはやすく成ぬへし心すまさむかたのなき哉

【校異】 (七・ウ) ②定家—権少僧都源信「承」、③成ぬ—有ぬ「承」、②

③²⁴⁶番歌—ナシ「内」

選子内親王

空すみて心のとけきさよ中に有明の月の光をそさす

【校異】

(七・ウ) ⑤さす—ます「承」

後京極

245

246

247

248

249

250

- 94 -

【校異】 (八・オ) ③參議—ナシ「内」、⑤～⑥〈左注〉—ナシ「内」
宝塔品 ソトキブツセニアリ
尔時仏 前有二七宝塔一といふ心を読侍りける

を放ててらすとなり

目もあやに雲井にそみるいにしへのひしりの住し宿のけしきを

此品を宝塔品と申事は方便品より八品と

前大僧正慈鎮

宝塔涌現し給へり是は過去の世に宝淨

(八・ウ)

世界といふ国に多宝仏と申仏をはします

しかるにこの仏大事の因縁なれども法花

経をとき給はさるゆへにわれ滅度の後全

身を宝塔にいれよ十方彼との世界に法花

をとかれん所にゆひて誓すへしと誓のへり

いま此品のとき一基の塔婆に乗して湧現

し給ふかゆへに目もあやにとも又いにしへの聖

のやとともにへりあやにとは恠といふ心なり寄

特の寄の字をよめり

【校異】

(八・オ) ⑧宝塔品 ソトキブツセニアリ
尔時仏 前有二七宝塔一といふ心を読侍り

ける—宝塔品「内」、⑨前大僧正—ナシ「内」、(八・ウ) ①～(九
・オ) ②〈左注〉—ナシ「内」

後嵯峨院御製

いにしへもいまもかはらぬ月影を雲のうへにてながめてしかな
ける—宝塔品「内」、⑨前大僧正—ナシ「内」、④でしかな—せしかな「内」

世々をへて木のもとことに散花は久しく匂ふためし成けり
空には宝塔のうちに釈迦多宝の二仏並て
座し給へりもろくのうゑ木のもとには釈
尊の十方世界に御身をわけてあまたの仏
と現し給ふも此ときみなわしの御山にきた

(一〇・オ)

法性寺入道前関白太政大臣
聞人もはるかにこれをあふげとて空にそ法をとく声はせし
多宝仏の来給ふ故は釈尊の説法の真
実にてむなしからすと証明せむかためなり
されは塔の扉もひらかすして内より大音聲
を出して善哉と釈迦牟尼世尊如所說者
皆是真実ととなへ給へり

【校異】 (九・オ) ナシ—宝塔品「内」、⑥集付ナシ—統古今「内」、⑧は
るかに一ひとへに「内」、⑧空にそ一空にも「内」、⑦～(九・
ウ) ①〈左注〉—ナシ「内」

(九・ウ)

多宝仏を読侍りける

參議雅經

ときのへし法の蓮の友なれやいかに契をしき忍ひけむ
多宝仏と釈尊と二仏の契さこそとなりし

き忍ふはしきりに忍ふとなり

【校異】 (九・ウ) ②を読侍りける—ナシ「内」、③參議雅經—ナシ「内」、

④蓮—筵「内」、⑤～⑥〈左注〉—ナシ「内」

諸宝樹下のこゝろを

前大僧正慈鎮

世々をへて木のもととに散花は久しく匂ふためし成けり
空には宝塔のうちに釈迦多宝の二仏並て

座し給へりもろくのうゑ木のもとには釈

尊の十方世界に御身をわけてあまたの仏
と現し給ふも此ときみなわしの御山にきた

りて木のもとに座し給へりそれを久しく

にほふためしといふなり

【校異】 (九・ウ) 諸宝樹下のこゝろを 前大僧正慈鎮—ナシ「内」、⑨世

ト一代^ミ「内」、⑩^ミ (一〇・オ) ⑤〈左注〉—ナシ「内」

ウツスモロ^クノテンニンヲ
諸 天人—

256 三一度まで移しかへてしまほ空に数かきりなき光を見る

分身^{フンジン}の諸仏をすへ奉らむかために三度地を

きよめ給へりさて 清淨^{セイジョウ}の地形のうへに

無量^{リヤウ}の仏たち座し給ふ故にかくいへり

【校異】 (一〇・オ) ⑥移^{ウツスモロ}諸 天人—ナシ「内」、⑦かへてし—かへ

ても「内」、⑧^ミ ⑩〈左注〉—ナシ「内」

皆在^{ミナアリ}二虚空^{コクウニ}

あまの原思ひかへらぬ雲の上にまことの道の宿となりぬる

もろくの仏のすみ家となるといふ事なり

【校異】 (一〇・ウ) ①皆在^{ミナアリ}二虚空^{コクウニ}—ナシ「内」、②上に—上も「内」「承」、

③〈左注〉—ナシ「内」

宝塔品のこゝろを

僧都源信

おほ空を手にとる事はやすくとも法に逢ふへき折やなからん

これは法花経とく事かたきをいふとき色^ミ

のかたき事をあけて比量し侍る中に人

あつて手に虚空^{コクウ}をにきらむもかたからし

此経をとく事かたしとすといふ心なり

【校異】 (一〇・ウ) ④のこゝろを—を「内」、⑤僧都源信—前權少僧正源

258

257

信「内」、⑦^ミ ⑩〈左注〉—ナシ「内」
モシンシタクモタモツモノワレスナハチクハニキス
若暫^{モタモツモ} 持者^{モタモツモ} 我則^{モタモツモ} 歎喜^{モタモツモ} の心を
俊成 (一一・オ)

259 卷くをかされるひもの玉ゆらもたもては仏よろこひ給ふ

法花経をしはらくもたもては仏よろこひ給ふと也

【校異】 (一一・オ) ①若暫^{モタモツモ} 持者^{モタモツモ} 我則^{モタモツモ} 歎喜^{モタモツモ} の心を—若暫時者^{モタモツモ}

我即歡喜^{モタモツモ} 「内」、④〈左注〉—ナシ「内」
擔^{ミナヒラカレタルヲ}負^{ミナヒラカレタルヲ}乾^{ミナヒラカレタルヲ} 草^{ミナヒラカレタルヲ}といふこゝろを

前大僧正慈鎮

260 法のためたとふるわかなたけき火に枯たる草の焼ぬのみかは

是も人あつて劫末^{コトマツ}の火に枯たる草をおひて

火の中に入たらむにやけさらむもかたしとする

にたらすさて法のためたとふるわかなとは仏のむ

かし法花経を学び給ひし時^{モナ}菜^{モナ}をつみ薪^{タキ}を

こり給ふ事なりされはたゞ枯たる薪^{カケル}を

おふ心にてそ侍らむなを尋ぬへし

【校異】 (一一・オ) ⑤擔^{ミナヒラカレタルヲ}負^{ミナヒラカレタルヲ}乾^{ミナヒラカレタルヲ} 草^{ミナヒラカレタルヲ}といふこゝろを—ナシ「内」、⑥前

大僧正慈鎮—ナシ「内」、⑦たとふるわかなたけき火に—たとふる

はよなたけき火に「承」、⑦かは—哉「内」、⑧^ミ (一一・ウ) ③

〈左注〉—ナシ「内」

付記 本稿の翻刻については、国文学研究資料館および内閣文庫に御

許可を賜った。ここに深甚の謝意を申し上げる次第である。

(うちの ゆうこ・九州大学大学院博士後期課程)